

## 領域「環境」を再考する

—— 保育者を志す学生の関心と保育現場の実態 ——

Reconsidering “the domain of environment” in Early Childhood Education and Care  
—— The Interest of Students Aiming to be a Childcare Worker and the Actual Conditions of Childcare Field ——

森 知 子\*

### 要 約

本研究は、領域「環境」に示されているねらいや内容を再考し、それらをふまえた保育のあり方を検討することを目的として、保育者を志す学生の領域「環境」への関心と学生が実習をとおして学んだ保育現場の実態を質問紙調査によって明らかにした。学生の関心が高かったのは、“身近な自然環境とのかかわり”“子どもと対象との直接的なかわり”についての視点であり、“数量や図形”“標識や文字”“文化や伝統”“情報や施設”などのかかわりについては、関心が低かった。一方、保育現場では、“数量や図形”への関心を高める活動を具体的にみることができおり、保育の実際から学生が学ぶ意義は大きいことが示された。“情報や施設”“国旗”“文化や伝統”とのかかわりは、学生の関心の低さと共通して、保育現場で学ぶ機会を得ることは難しかった。学生は、これらの項目を子どもの身近な環境として認識し難いと感じており、これらについては、子どもに、いつ・どこで・何を・どのように伝えるかといった明確な保育者の視点が必要であることが推察された。

キーワード：領域「環境」、保育者養成教育、保育、幼児教育

### I. 問題と目的

グローバル化や情報化の発展、都市化や核家族化による生活環境の変化、少子高齢化の進行等、子どもを取り巻く環境の変化は著しい。人間は、誕生した時から周囲の環境に働きかけ、環境との相互作用によって発達していく存在である。子どもの育ちを考えると、近年の複雑・多様化した環境をとらえ、時代に応じた保育を実践していくことが肝要である。

保育・幼児教育は、「環境を通して行う」ものであり、身近な環境との関わりに関する領域「環境」は、保育の基本を実現するための視点となる<sup>1)</sup>。保育内容の領域は、子どもが生活や遊びのなかで身につける総合的経験を保育者がいくつかの要素に分けるときの観点とされている（小川、2002）<sup>2)</sup> が、子

どもの生活と遊びは環境のなかで展開されていることから、領域「環境」は他の領域すべての基盤であると考えられている（中沢、2008）<sup>3)</sup>。

2017（平成29）年に、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が改定された。身近な環境との関わりに関する領域「環境」では、従前どおり、子どもの発達をとらえる視点として「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことが掲げられ、子どもに育つことが期待される心情・意欲・態度が「ねらい」として次のように示されている<sup>4)</sup>。

\* Tomoko MORI 聖和短期大学

1) 中沢和子 2008 新訂子どもと環境 萌文書林

2) 小川博久・新井孝昭 2002 環境 ひかりのくに

3) 前掲1)

4) 2017年の改定では、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の共通化を図り、「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の各領域における「ねらい」「内容」「内容の取扱い」が記載された。「保育所においては発達による変化が著しい乳幼児期の子どもが長期にわたって在籍することを踏まえ、乳児・1歳以上3歳未満児・3歳以上児に分けて」（保育所保育指針序章5改定の要点（2）保育の内容抜粋）示されている。幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても同様に示されている。

(保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においては、3歳以上児の保育に関するねらいを示す)

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

これらの「ねらい」を目指して保育者が援助し、子どもが身につけていくことが望まれる事項として「内容」が掲げられており、2017年の改定では、「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」事項が新設された。また、「内容の取扱い」として、「文化や伝統に親しむ際には、正月や節句などの我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること」が新たに示された。2016年の中央教育審議会答申<sup>5)</sup>(以下、答申とする)に示されているように、子どもを取り巻く社会状況や生活環境の変化、「社会に開かれた教育課程」<sup>6)</sup>の重要性を踏まえた内容の見直しであった<sup>7)</sup>。

答申では、子どもが学びの過程において「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という「見方・考え方」(物事を捉える視点や考え方)についても強調された。幼児教育における「見方・考え方」は、「幼児がそれぞれの

発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね、遊びが発展し生活が広がる中で、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、諸感覚を働かせながら、試行錯誤したり、思い巡らしたりすることである」<sup>8)</sup>とされている。

保育者は、子どもが遊びや生活をとおして、主体的に人や対象(モノ)にかかわり、様々な体験をすることができるように、意図的、計画的に環境を準備しなければならない。中沢<sup>9)</sup>は、「環境とは生きている生物(人間)の周囲にあって、相互作用を持つものすべて」であるとし、「主体が変われば環境の要素の取り上げ方も違ってくる」と述べている。子どもの発達にふさわしい環境のあり方は、保育者の環境のとらえ方や考え方に影響されるといえる。秋田(2018)<sup>10)</sup>によると、領域「環境」は他国にない日本独自の領域であるとされ、領域「環境」が示す内容は、これからの我が国の保育を考えるにあたって大切な視点となるといえよう。

本研究では、2017(平成29)年に改定された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の領域「環境」に改めて注目し、そこに示されているねらいや内容を再考し、それらをふまえた保育のあり方について検討する。質問紙調査をとおして、保育者を志す学生の領域「環境」の内容への関心と学生が実習をとおして学んだ保育現場の実態について分析を試みる。

## Ⅱ. 方法

### 1. 対象

A 短期大学保育科2年生138名。調査対象となった学生は、2018年4月～7月にかけて、幼稚園実習、保育所実習を実施した。有効回答は134名(97.1%)であった。

5) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」平成28年12月21日 中央教育審議会 pp.78-79

6) 「社会に開かれた教育課程」として、答申(2016)には次の点が重要となることが示されている。前掲5) pp.19-20  
(1) 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。

(2) これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。

(3) 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

7) 「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」においても共通の内容となっている。

8) 前掲5) p.73

9) 中沢和子 2008 新訂子どもと環境 萌文書林 pp.8-9

10) 秋田喜代美編著 2018 保育内容 環境[第3版] みらい

## 2. 実施時期

2018年12月に集団実施法による質問紙調査を実施した。倫理的配慮について、質問紙の冒頭に明記するとともに口頭にて説明し、賛同を得た者に調査を依頼した。

## 3. 質問紙

2017（平成29）年告示「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（以下、教育要領・保育指針とする）第2章「ねらい及び内容」における領域「環境」に示された内容の項目をもとに質問紙を作成した。質問紙は、以下Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの内容で構成された。

- Ⅰ. あなたは、領域「環境」に示されている以下の内容について、どの程度関心をもっていますか（23項目）
- Ⅱ. 幼稚園実習では、以下の内容に関係があると思われる保育活動を見ることができましたか（12項目）
- Ⅲ. 保育所実習では、以下の内容に関係があると思われる保育活動を見ることができましたか（23項目）

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの各質問項目について、4件法（「そう思う」「ややそう思う」「あまり思わない」「そう思わない」）で回答を求めた。

質問Ⅱ、質問Ⅲでは、実習したクラスの年齢についても尋ねた。

本研究では、教育要領・保育指針の領域「環境」の内容に共通して示されている12項目（表1・保育指針は3歳以上児の内容）を分析の対象とする。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 領域「環境」に関する学生の関心

教育要領・保育指針の領域「環境」の内容に共通して示されている12項目（表1）についての回答（4件法）を4～1点にコーディングし、平均値を比較することで、学生の関心の程度をみた。結果を表2に示す。

領域「環境」に示された内容のうち、学生の関心の高い項目は、平均値の高い順に「⑦身近な物を大切にする（3.46）」「③季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く（3.27）」「⑤身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする（3.25）」「①自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く（3.19）」「④自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ（3.10）」であった。

自然、季節、動植物といった身近な自然環境に関する項目は、学生の関心が高いことが示された。また、“大切にする”“遊ぶ”といった子どもと対象（モノ）との直接的なかかわりに関する項目と、子どもと対象（モノ）とのかかわりに必要な“気付く”と

表1. 領域「環境」の内容に示された項目

①自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
②生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
③季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
④自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
⑤身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
⑥日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。
⑦身近な物を大切にする。
⑧身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
⑨日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
⑩日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
⑪生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
⑫幼稚園、保育所内外の行事において国旗に親しむ。

表 2. 領域「環境」の内容における学生の関心 (n = 134)

項目	平均値
①自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。	3.19
②生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。	2.97
③季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。	3.27
④自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。	3.10
⑤身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。	3.25
⑥日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。	2.81
⑦身近な物を大切にすること。	3.46
⑧身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。	2.96
⑨日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。	2.52
⑩日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。	2.63
⑪生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。	2.83
⑫幼稚園、保育所内外の行事において国旗に親しむ。	2.35

いう視点についての項目も保育を学ぶ学生にとっては理解しやすい内容であるといえる。

一方、学生の関心の低かった項目は、低い順に「⑫行事において国旗に親しむ (2.35)」「⑨日常生活の中で数量や図形に関心をもつ (2.52)」「⑩日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ (2.63)」「⑥日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ (2.81)」「⑪生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ (2.83)」であった。

領域「環境」の内容に示されている“数量や図形”“標識や文字”“文化や伝統”“情報や施設”などのかわりについては、子どもが遊びや生活のなかで次第に興味や関心をもてるように援助していくことが求められる。“数量や図形”“標識や文字”は抽象的な概念であり、保育者を志す学生は、子どもの具体的な体験をとらえてこれらに関する指導をすることに難しさを感じているのではないかと考えられる。また、学生の関心の高かった自然環境と比べて、“文化や伝統”“情報や施設”などの社会・文化的環境は、子どもの生活に身近な環境として認識し難いのではないかと推察される。

「⑥日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」については、2017（平成29）年より新たに教育要領・保育指針に加えられた項目である。「⑫（前略）国旗に親しむ」ことも含めて、我が国の文化や伝統に親しみをもつことに対する学生の関心の低さが示された。

近年、保育者を志す学生自身も家庭や地域社会において“文化や伝統”“国旗”に親しむ機会が減っている。様々な文化・伝統との出会いや異文化の理解、国際的な視野を深める体験など、学生の関心を高めていく養成教育のあり方を検討していく必要があるといえる。

## 2. 領域「環境」に関する保育現場の実態

本研究では、学生の幼稚園実習・保育所実習における学びの場面から、保育現場の領域「環境」に関する活動の実態を探ることとした。

実習でかかわった子どもの年齢を考慮し、幼稚園実習を経験した学生128名、保育所実習では3歳以上児のクラスで実習した学生71名を対象とした。

幼稚園実習、保育所実習でみられた、表1の項目に関係があると思われる保育活動について4件法で回答を求めた。平均値の結果を表3に示す。

「学生の関心」で得られた平均値との比較を図1に示す。

保育現場でみられた活動は、学生の関心のあった項目よりも殆どの項目で平均値が高くなり、保育の実際から学生が学ぶ意義は大きいといえる。特に、「②生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ」「⑧身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ」「⑨日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ」は、保育現場において具体的な活動をみることがで



表3. 領域「環境」の内容における保育現場の実態

項目	幼稚園の実態 (n = 128)	保育所の実態 (n = 71)
①自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。	3.30	3.23
②生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。	3.23	3.14
③季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。	3.33	3.20
④自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。	3.31	3.20
⑤身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。	3.31	3.25
⑥日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。	2.65	2.65
⑦身近な物を大切にする。	3.36	3.41
⑧身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。	3.25	3.11
⑨日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。	2.87	2.75
⑩日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。	2.80	2.68
⑪生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。	2.65	2.58
⑫幼稚園、保育所内外の行事において国旗に親しむ。	2.05	1.90

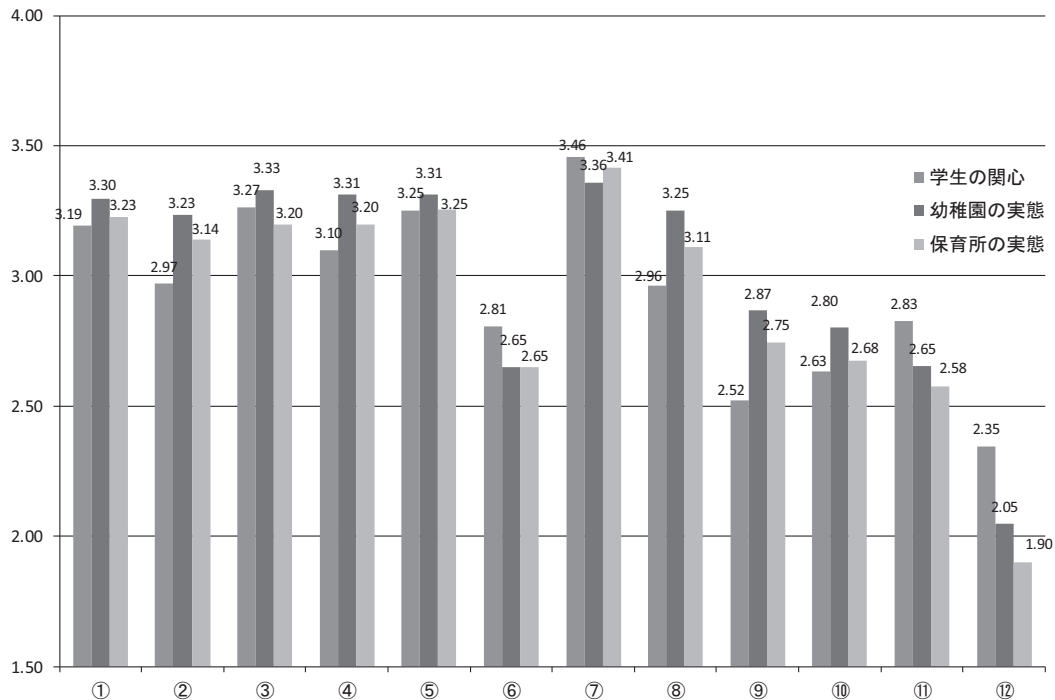


図1. 領域「環境」の内容における学生の関心と保育現場の実態

きているといえるだろう。

一方で、「⑪（前略）情報や施設などに興味や関心をもつ」「⑫（前略）国旗に親しむ」「⑥（前略）様々な文化や伝統に親しむ」は、学生の関心の低かった項目と共通して、保育現場で学ぶ機会を得ることは難しかったようである。実習時期との関連も考えられるが、これらへのかかわり方や保育への取り入れ方について、学生の理解が深まっていないことが考えられる。“情報や施設”“国旗”“文化や伝統”については、子どもに、いつ・どこで・何を・

どのように伝えるかといった明確な保育者の視点が必要となるといえる。

#### IV. まとめと今後の課題

本研究では、領域「環境」の内容を踏まえた保育のあり方を考察するために、保育者を志す学生の領域「環境」への関心と学生が実習をとおして学んだ保育現場の実態を質問紙調査によって分析した。

学生の関心が高かったのは、“身近な自然環境とのかかわり”“子どもと対象との直接的なかかわり”

についての視点であり、“数量や図形”“標識や文字”“文化や伝統”“情報や施設”などのかかわりについては、関心が低かった。一方、保育現場では、“数量や図形”への関心を高める活動を具体的にみることできており、保育の実際から学生が学ぶ意義は大きいことが示された。“情報や施設”“国旗”“文化や伝統”とのかかわりは、学生の関心の低さと共通して、保育現場で学ぶ機会を得ることは難しかった。社会－文化的環境の保育への取り入れ方やそれらの環境と子どもをつなぐ保育者の役割について、学生への理解を深める必要性が示唆された。

森・張ら(2015)<sup>11)</sup>は、保育所実習を終えた学生570名を対象に質問紙調査を実施し、実習生の保育環境のとらえ方について分析している。実習園の特徴や特色について調査した結果、実習園の周辺環境は、80%以上が住宅地であり、園庭の中に「砂場」(91.7%)「遊具」(80.2%)「花壇」(72.9%)は備えられているが、園庭の自然環境が「豊かである」と回答した学生は20%に満たず、半数近くの学生(41.2%)が「自然が豊かであったとは思わない」と回答した。そのような環境で実習した学生に「実習体験を通して、あなたが思う環境とは何か」を複数回答で求めると、「人」であると回答した学生(74.0%)が最も多く、次いで多かった回答が「自然」(68.0%)であった。保育者を目指す学生は、子どもの育ちにとって、自然とのふれあいが大切であることを実感していることがみてとれるが、実習では、人的環境としての「保育者の役割」の重要性を学び、実習生自身も人的環境として子どもとのかかわりについて考える機会となっていることが推察された。

保育者は、子どもの育ちに影響を与える人的環境となることはもちろん、保育の展開に必要な環境をどのように準備し、その環境とどのように関わるのか、保育者自身の価値観が保育に大きな影響を与えることを理解しておく必要があるだろう。実習園の環境は、実習生の環境に対する考え方につながる。実習でかかわった子どもの年齢や保育の特性、実習園の保育の方針なども実習生の学びに影響すると考えられる。本研究では、実習園の環境や保育方針などを勘案しなかったが、今後は、これらのことも包括的にとらえ、保育現場での学びの実態を検証する

必要がある。

子どもの遊びや生活は具体的な環境を通して行われる。本研究の結果で示された学生の関心が低かった項目と保育現場であり見られなかった項目について、子どもがかかわる対象についての理解や認識がより深められなければならない。特に、「⑥日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」「⑪生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ」「⑫幼稚園、保育所内外の行事において国旗に親しむ」の3項目は、学生の関心の低さとあわせて、保育現場で学ぶ機会を得ることが難しかった。保育者を志す学生に、これらの内容を教授する際には、子どもの育ちにふさわしい明確なねらいを設定し、遊びや生活を通じた適切な指導法を示す必要があると考える。保育を計画する際には、子どもにとって身近な環境が準備され、子どもがそれらに主体的に関わり、心動かされる体験が展開されるよう配慮が求められることは言うまでもない。

子どもを取り巻く環境が情報化社会、デジタル社会へと変化を続ける現代において、本物の素材や具体的な事物を通しての保育活動が今後ますます重要になるといえる。そのことをふまえて、不易流行の保育のあり方を考えていく必要がある。

#### (付記)

本研究は、森知子・中川香子「領域『環境』を再考する(1)―学生の関心と保育現場の実態」日本保育学会第72回大会(2019年5月、大妻女子大学)を加筆修正したものである。

#### (謝辞)

本研究にあたり、聖和短期大学 中川香子教授にご示唆、ご助言をいただきました。ここに記して、感謝いたします。

#### (引用・参考文献)

- 秋田喜代美編著 2018 保育内容 環境 みらい
- 平山許江 2013 領域研究の現在 環境 萌文書林
- 厚生労働省 2018 保育所保育指針解説 フレーベル館
- 森知子、張貞京、大橋喜美子、平野知見、松尾寛子、荒井庸子 2015 実習生からみた保育環境のとらえ方に関する研究 日本保育学会第68回大会
- 文部科学省 2018 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- 中川香子他編著 2018 保育内容 表現 みらい

11) 森知子、張貞京、大橋喜美子、平野知見、松尾寛子、荒井庸子 2015 実習生からみた保育環境のとらえ方に関する研究 日本保育学会第68回大会

- 中沢和子 2008 新訂子どもと環境 萌文書林  
小川博久・新井孝昭 2002 環境 ひかりのくに  
岡野聡子編著 2019 子どもの生活理解と環境づくり改訂版 ふくろう出版  
山内昭道編著 2000 子どもと環境—自然・社会とかわる子どもたち 文化書房博文社  
幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申）平成28年12月21日 中央教育審議会